

## 詩編 第49篇 9節

「人はとこしえまでも生きながらえるであろうか。墓を見ないであろうか。」

誰もが直面している現実を直視する。懸命に生きることから生まれる歌である。日々の歩みに手ごたえがあり、生きる者のところから溢れる歌である。問う歌は、問うさきから答えを承知している。その現実には生きていないからである。それでも、滅びを問う。

墓を目の前にして問うお方がいる。そのお方と対話する。聞こえてきたとき、問いが問いだけで終わらない。問いが風のように過ぎ去らない。滅びが、墓がそのまま問う者の前に居座らない。それは滅びと墓を超えるお方、この歌を聞いてくださるお方がそこにいるからだ。だから、歌を歌える。歌っていること事態が滅びと墓の現実をすでに超えている証言である。

滅びに囲まれている。墓が広がっている。これが現実だ。だから、とこしえまで生きられるか、だから墓をみないだろうか、と問わざるをえない。現実には直面して、悲しくも厳しい事実を直視してわけがわからないと嘆くように、問うように歌ってよい。そのすべてを聞き、受け止め、その現実を遥かに超える真実なお方がそこにおられるから。注がれている眼差しがある。